和朝
今昔物語
作
藤原
巻之六
世俗部
六

尾州
名古屋
伺知家

今昔物語 倭部 六目録

○世俗傳

一 平維茂郎等被殺語
二 維茂討藤原諸任語
三 平貞盛欲害醫師語

書肆 [illegible]

[illegible]

江戸 日本橋 [illegible]

今昔物語 倭部六

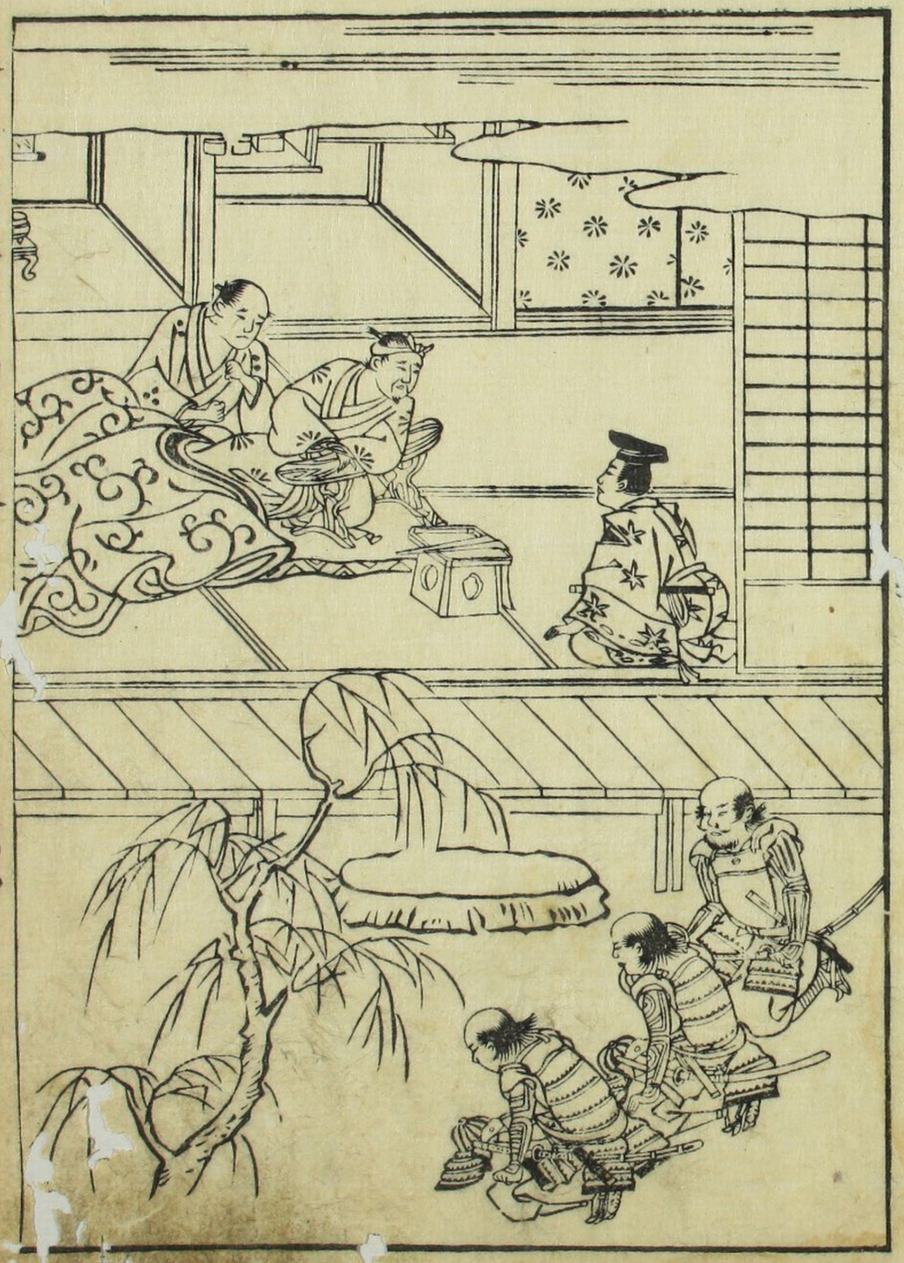
○世俗傳

一 平維茂郎等被教語

今はむかし上総の平兼忠といふ者あり。平貞盛が子乃繁盛がすえ。兼忠上総守にて其国に有けり。余五将軍維茂（兼忠子貞盛養子信濃守帯刀従五位上鎮守府将軍）といふ者あり。其国に居てうしろ。其国にふかく武勇をたしなみて上総守なりてもとれば。ようこびすぐして年ふるといひけれバ。其国を捨て。其侍ともいとまをとりて。維茂来りぬ。其国の内

かゝる風おこりくれば。外よ出給ひて側よりたゝくるを。侍
男に腰をかゝうせて。外ゝう。維茂門ゝ入坐ようして。
年来乃事どもとかゝうるを。維茂ゝ具しゝる郎等
の中に宗徒れ者ども四人い調度を負て。前をゝ岳
をゝびゝう。其第一よ長ゝる者ゝ紙右郎めとゝて。年の程
乃大男の鬚ちゞくいゝ色しゝて。松をゝ氣によれ長と
見てゝう。けゝれ兎も角も後をくゝ男にゝ紙見知ゝう
中向ゝ。知ざるよゝと答ゝ。兎もあの右郎めを海ゞ又
を討ゝる者ゝれゝ。何程いまゞ地されゝしゝべゝゝでゝう
ちゝんといゝて男きてゝげゝて又ゞ人よ討ゝとゝいゝ

付れども。歌とゝれゝもゝでゝあると作ゝに。今日けゝて
歌を見付るよゝいゝて。涙をゝうゞくゝ立ゝ。維茂い物
ちゞくゝそ日暮ゝれゝば。国家よ行ゝう。右郎めゝれゝう
私宿よ行て。物くゝい酒のゝて。常に用ゝられゝば枕よゝて。
出の方をゝて。侍ゝ行ゝう。朋緑甲冑と。布乃大幕
二ゝ。引ゝ張ゝて。幕ちゞ通ゝめゝゝ。ゝう。ゝて。ゝい九
月晦日乃事ゝれゝば。所ゝゝ羅を。家人どもい
調度を負てゝちゞゝう。乃之畫ゝ。ゝくゝ。
張ゝ。無いまゝけゝゝば。祝ゝい討ゝゝゝ。ゝゝ。
うの小男ゝ父ゝ歌をゝゝ。今日ゝゝゝゝゝゝ。



いそぎて腰刀のさたとりて情をたてまつる。第二人て去ぬ
めぐ姫宮よりて家人名ぐる人合和とおもぐ所ぐ風
さりげなき体して内よりて形象をもちて結仕のあ
ふもれ。幕引きて壁のわづに屏居く親乃歌と移
ぬさてあれば天道も見くわたれうへべ。本意を遂
しめ結へて形会してぐ人ちづまち紙結うるる。閉く物更
ぬ物ねを方命をうづべば。長途をものぐて酒をばを
ごしめおねもちづ寝うてとぬ乃男ひそに来び
よりて。喉をうれ切くあへ出ぬうれど。幼へ行れなる
てうう。我ゐ申て後ゐ形そ紀うれば。郎等大弥を

今はきむしてゐてうつぶしまみをになりて死ぬるを
郎等これをみてこはいかにとのたまへばあるじの方を
ねらひて欲いはばくよあるぞとばかりにて
出ぬるものあり。郎等よりあにちくようる者をけさとび
ものぐるひよりなほ一ちうぶひうりおのく者をあぐて。
あまりをそれたるあいだ。何とて者をとび立給
いぶるをんぬ。ふ日ばかりまで来ぬ。年
ごろうしろ者にしてはくまいりをしまゐらせ。運
のつたなきあいだにいかにぬぐぱかれさ来ぬれく横
あまりてくるおそれてぞ。いのちは。維茂是を

聞給ふ大ゆ井ぐのさ。是ひとよ我死なり。本国にてかく
あんい見非ず。ちゝ母国にまく家人をうゝせしいお
ほく祈ゝたるなり。ちゝ母ぶみ人ゝ公ゝうきを事あり。
其者のゝ小侍ゝて守殿ゝはくゝ兵ゝう奴ゝ不ゐなる
べゝとて鎧ゝゆゝて兼忠ゐひゝいゐ。維茂ゝ石具
しゝ郎等ゝ公。物ものゝうゝされ維茂。此国ゝ来てかる
ちゝんあいるい。維茂ゝ物ゝる死ゝり。是い鎧ゝ入れて
ぞおい作ゝ。ゝゝせゝ兼忠ゝる者ゝて。射殺ゝる者乃
ゝれ小男殿ゝ作ゝ。ゝゝ。ゝまゝくゝまゝゝ作べゝ。うまゝ
をゝく向ゝゝ作ゝ。兼忠国ゝたゝふゝ

うの男のあるなるべし。其故い昨日其方の仕せしか。
去夜みいをこ作しを彼小男にうれて已が又を射さ
ふ者をこいつらば。明日みなりて立ぬ。常よい
片時も側をさらはなくはける奴ぞ。昨日の暮よりて不
通よりてざるいかにおもきまたりとこうしいらいしに
今朝朋輩どもがつをもべ其男い夜前腐りて
刀を鋭ものを語しなりか。かくごとしあいとれば。れが
あるこうぶいれしかるに此のとくとうとのあ
い実に其男れちくざなりがらしなりんそあるや。
中に向くてまこうとべしかいまたかし

おくおそるるこの又なりかり。其人報しこうあるな
これそこいこうぞやいかこすべき。親乃新兵衛をべ
天道もゆるしなかりかるに其人よつきて世ものまんば
其人が讐をいい討のあ人なりと。大音に名乗
こられいい。維茂おくとてなりとこいてかこりて
其座をたちてぱ。逗留無をして。陸奥ま
こうこうそのちかこうしこうる男ぞ日など
ることをいまこうかけ。ちこうる者ぞたこうかこれは
ぱ男人よ公に言れてつるいこうき者よこれこがつく程
りおく病つきてあれいかすもあこれをなしかい

ゆゑ。親乃歌うたくいの例ありてつぎに男うた
一人にてさぶらひ家人を除きて他もれる中に入る。
あるべく討得らい。実に天道のゆゑ給へ故なりと
腐ゆゑなんぬ。ひらはうえうえうえも

二　平維茂討藤原恵諸任語

今いしく寳方中将　正四位下・陸奥守。定時男　陸奥守にありて
そもそもよくぐうるるぬ。屋んでこれさ公達をれば国内の去
ども少守公答えしてて。夏夜館のうち仕わうる事な
うとうう。甚だ同じ平維茂にてあり。是い丹波守
平貞盛分。武蔵に於守解盛ゞ子。上総介兼忠ゞ橋子

なり。貞盛そよりあるあるて。物語り物の子紙あるうて
出ゆゑ出ゆゑ。維茂い鈴中年年あるうれば。ゆゑ家
いくくくいくれば。字紙餘五君といる。一書曰貞盛弟曰繁
盛。繁盛子曰兼忠。乃是維茂父也。天慶年中。貞盛與藤秀郷誅
戮凶賊平将門。功名蓋世。任陸奥守。兼鎮守府将軍。以甲東方
而擇族類勇敢者養之為義子。以序其齒。有太郎次郎以下至
十郎之行。而復叙其餘維茂生而剛勇也。然年弱。當第十五。故
名之曰餘五郎。貞盛卒後。留守戍奥別州民皆知其健強。
是い田原ゆゑ秀郷といいるる。按大系圖秀郷。干常。公脩。兼光。頼行。兼行。師
四郎といいるる。種澤俣余五将軍敵人。與本文所載甚相違
然秀郷者貞盛同時之人也。維茂者貞盛之養子也　けこ人よ
以此考之以澤俣為秀郷五代之孫者恐非正說
しゆゑ田畠の事とあるそひて。おのくゆゑんうつくえ

どもいづまでいてところ一理ある上に二人ともに罔りて
もてるべき者なりけるべし。是を旅をわらうして行くしあるう
ちに罔自三年といふて失ぬ。藤實方長德四年十一月十三日於二任國一卒去其
後いとゞしよりたどり紙增よりて。合紙の用をたつ
つもなり。雙方膳をたてまつり日紙定めくいづまれ所とて
あるうあんと紙ほと。維茂が方にい兵三千人ばかり。任任
ゞ方には千餘人ばかりをれば。任方に欲しゞ。先
ひたい我とやあるんとて。常陸國へ新々れば。維茂國て
されば。こを我りに向いもそんかとのぐてあり事あり。
あつまり居てる兵ども。たゞくこそあるを。程久しくあれ

ハ國事あるものどもいとて居る本國よりくりくり。澤膳かく。
そうと扶かをて。ものて維茂が館くり押寄くり。ばしを十
月朔日に出府だくりあるゆ。余五ゆ居をる館のまれ大さ
なる池ありて。水鳥ゆ居てるゞ。ゆくんさつゞてけくくを
くり音をけきゞ。余五井ゞくりて。郎等を紙よゞて。水をれ
さくぐい歌のよをてくりて。郎等一人ちんのをを
ばくり。潮茂負。馬くり鞍を。櫓よのゞれといてくくを。
見をてつくいしる郎等ゆ。ゆくりて。南部よ軍士四五所
ゆ完落して。まるまるよりて作とりに。余五ゆををゆ。
ひして沢殿よりをて。ゆくり。岩土ものゞくを歌してゆり。

あらねば運命今日にきはまりつれどもまなこして
一防ぎふせぐべしとて欲のよせくるべき道に騎りて楯を
突てはやく待ちかけたり。家内の侍ども負けじとする者ども
どもくわれつれ人々にいるゝ者ども。維茂今は手にいるものもすぐべからず
ゆかりとも言はで妻女（土佐守藤原季随女）と幼児滋定（左衛門太輔従五位下。系図作ル二鬟貞一）
とれ。人々を添へて上のやかたへはやく逃げさせけり。今は心やすし
とて心をしづめて下知し、籠者して働くといへども、まづ家の
人数すれば、おほかたわかれて逃げてうせぬれば、一円にわづかのみ
入て家に火をかけて焼死のほか、のがれ出る者をば一人も
残さず射外さず、あけて火消されば、射殺され焼殺さ

れたる死骸八十余人ぞありける。いづれも余五がすぐれたる
郎等なれども、皆まつらう焼屋の内にて死したれども。猫
これのがれしとすれば、余五もいはくれたりけん。宗
ひたすら叡りんと案堵して、手負ひうけて帰りけり。
大君（名ハ好則、五位下）といふ者の許に立よりぬ。大君ハ維
守橘惟通（子輔政）が子なり。武に長じて道を守る者なる故
一生敵もなくして万人に請はれけり。沢勝が妻が
兄なり。時に大君今沢勝にて一戦に勝利を得ずして
しばしみまかりぬれども、彼が軍の先陣の者は
家まことに討たれずして絶えざりけり。余五が首

いみじう取て鞍のうへに結付まひらせといへば。
沢勝がいとく。嗚呼れ事の有つる君こそ。屋よこ免なり
せあくしかも。余五い者ども下知そこに素て打めぐり
あつまりひけるが。男ども射れば逃る者一人を見てど
射外斬ふ也焼新しる者男女おの八十餘人ありつ。物
猫ぐしてはしりけど。余五いだくう出べき。何の故よきと
なれ焼首公取りつぐさで。あらうぐひ仕つどとも
つ新よいつ。大君同てのうまとろもろげよたをひ
まつべ。されども義がとつて。余五が取てびぬし
せりやうと。鞍のとつけまに結付ぬ。ゆとくない

落居せあ。我い除五が君公よく知れがかくりもそこれ
ぞよ。我に飯酒を答べられども。終りあまでそこべ
しもで疾ものくとけしられく逃ぞれば沢勝いあく我
かくくれする義うれとおの多ひるに素そ六十所約
て。平くくる野の東にも。西ふ小川あるて馬より坊り
あ宮にやとあんとて。調度ふとて長うに。大君が降よ
つ大杯十餘新ふ六桶。鯉を酒はまでれくうる。
徒任よりこびて。酒をあてそよ取くのし。青
より已はまて取いて。喉いまにかくまに空腹う
酒買杯で飲れい。長く酔出く外長う。馬の蒭ぞ

も多くあつまりしかば鞍下し繻くくりて指縄だうにて
馬をうち出て行よ餘五い給ひそこらいて敵をしかけて射
こなしけまでも笠持つきて打ちまわり郎人を殺
ぬよ射まくれば甲をうちもぬぎ蓋をとりて。そこに所甲
貴公脱ぎて女の着たる袴を引くだして着て。髪を乱し
て下女の拵まして。たかぐりをかくしおて。煙の中より
逃げ出て。花ぐ出くにて西の方なる大河へ入て
葦れ出まぎれくるをかくしよりて。楊の根をくくか
ぐみ居たり。沢蟹が勢うてぬ。千町もゆうむく
ぐみ行よ。餘五が郎等の。かにわる者ども五十人うを

居て。焼死をうと。鬨をあげて。注ぐれむこと沼なり。うのうた
餘五河の中より。我い見たりとさけびうべ。色ぎ見を
をゆて。馬よりまろび落て。ぬぎすくと。はびなくる
けるかれ。餘五河よりあがるとられば。郎等どと各
郎人に成たりし。合物成おもりぬ。笠持る鞍を持
来る。餘五衣を着物と合て。法よいくく。我ぬ者
られは。ぬ人ぬ合成角子するべ。はらいうども。ぬ
げくいて。名成世にぐうんとちいて。所貝成うた。
ぬていぐきんといへば。郎等たぐいくぬれど。彩へ四五百
人ばかりぬ。所方へまづ。五十人なり。射殺ちくきに

あるべき後日に軍をぞあはせて我せのみべしといふ。餘五
是ぞ世にていとくうきものいてこころ一理ありといひけ
れども。今夜寺の内にて焼ころされこそすべ
今までかくのごとくんやのくのれこころいはせるよいあれば。
はてびけるきいあるこころ敵をうちたい我義ばかり
し命をおしまば。そこをいて後よ軍をおもきて敵にぞ。
我いかで一人なりともこれが家よりして一矢射ける
てるんとこころを定。命おしくい来るべきばといふ捨て。甲
冑ぞ着しるに敵うちそこみゆきべ。郎等だも作
りもんに作とそこそこ立てよりこころ。余五がいとく。

はは膝の紙袋の義にまぬかれて。其夜のあかつき極楽の
河をこえ。馬の鞍おろし。縛をとりて寝ころころ。我家ふ
するところ多くこころ。疲くこころの仲のあよ押参べ
しぬるに千万人あるとも。物の用に立ぬ。今日うこれい
いるのこれをこころ朝をべさぐといいてしくんこころ。其日乃
出えい。緋の縅の鎧。桃堂ぞ色の衣紙ぞ表毛の行騰
を履。後藤兵衛ぞ。伝矢世帯よ乃候二番こころ胡線
を負て。握太ちこころ弓。革巻ぞ紙持。打物ぞ
巻て。葦毛の馬の七すぐこころにて進退一物こころに乗
こころ。ちこころ。ぞ。馬七十餘人。歩兵世餘人。祝名百余

人なりぬべくて沢勝が宿に帰りて、大君が家の前を通るに、人をよばせて平維茂をば、昨夜焼討にあひて、遠く逃げて国なりにけるぞ。大君いかでよりて、維茂やあるらむ、即ち召しこそ、げらに紙燭よりの、ぶせて、を見させて居たるに、使の来たるに門を閉てさせじとしたれば、使は門の内よりいへて云はく、大君燈よりのぶせる事紙よりいでぬべくなれば、内にいれてよ、一町ばかりの大路に軍士百人ばかりて、色物どもに打ち乗りて、ずらく、葦毛馬に乗りて、緋の袴

を打ち揚げ、蘭の色の衣を着る者、綾の裏毛の紙の騰しにぞ乗りたる人、大君いとくそまぶ伴の隊立ちて、黒き馬いとくれる、大芦毛、あるいは、彼者うの馬に乗りて、打ちうをしんよ。作りて、向ふものあんや沢勝が。我いとくれば、時年ばかりにて、用いどもてぞ人をいうもどくあるべしや。我をうれてぞ、物をけるぞ。かくて、余立いたより人をとせて。沢勝が宿に、人をとるふ。案ずるに、たくばかりの無の南方に、色よ、外居たりと告げられば、けりべ疾くて。死ぬべくにてせて、その、苦しみ、思ひ、ぬ、紙にて、

乃とより南のそらに一声二声なきてとびさりた
ある貴まよせたり。沢勝ハおもひもよらぬ様なれバあやしくてさらバとて
持さわがしかりしハ山伏を見て弓矢を取て杖をとれ
て我乃他のとりおさへもありけれバあげるとて馬よりおりて敵
られもありし梢をめがけ綱をさげてもちあげられしくさ
漸よふを。維茂主従をよんで斬伏追ちらし。沢勝を射
ころして首を取り。それよりすぐに沢勝が家に押寄
たりけるといふ程に家の者どもハ。我君戦ひ勝給へり。
悦びて帰り給ふべしとおもひて。合物を設けて待ところに。
案に相違して。余五が軍士ども入来て。屋どもに火をつけ

向ふ者を射ふせ斬倒して後。人をつくし沢勝が妻
と女房一人を引出し。二人ともに市女笠をきせて馬に
のせて。余五が馬のさきにたてゝ。女をバ上下ともにつゝ
みけて。男をバ一人ものこさず射ふせよといひければ。片端
より皆射ころしたりけり。焼ほろぼして後。雑具に及びで
くろまで。大君が門前に寄て人をはなちて。沢勝君の妻
ハいかゞあらんとかたらバこの沢勝が妹にておはすれバ
げるとて。何しろふおくりまゐらせていはせたるに。大君
よろこびて門をひらき妹をうけとりて。終夜ありけるとぞ
いひ出したりける。余五ハ本城へぞ帰りけり。さて後

維茂朝臣八ヶ岡に名を挙て弦を引いたれ
ども其矢は左衛門尉藤原定ゆき公の子孫
あり〳〵と云ふ事也

桜井有

桜井維茂墓趾後岡蒲原郡小河荘岩屋村平等

三　平貞盛欲害醫師語

今は昔平貞盛朝臣丹波守にて其国にわたる
所に西塔出来たれば京より醫師を迎へて居
たりけるに病みくたびれたる人あり
いと薬ともして活さむとすれども
効なくして死ぬ。兒千とは妊婦の腹をさして男兒な
ればそれと薬よくして調合さるべしや。貞盛其子
乃左衛門尉維衡を呼でけ薬を求むること世に
ありてい。後朝遣はすに海の妻懐妊たり。幸に我
あるべきものぞ。維衡これを聞て用もくしむべ
きことけもでも相ふ得作りせば。貞盛いとう我
事也。是下いたべし外に居く。葬送の用云せしいと
ゝ。かくて左衛門尉醫師が許に行てこれ
法くかくれば。醫師内にて我を乖とのぐべきと
て。館に行て来いまさせ。貞盛に向べ。貞盛云ふ
左衛門尉が妻懐妊たり。男兒を産むと聞醫師

それ、何のうきし。我流い薬にすべしとのりあうへきと
いへば、炊飯女の懐妊して六月なるを出させて後を
割てみるに女子なりぬれば、おのおのかへて妊婦の
りう腹を割て男子を取出して病を癒しぬる。
此度の報酬とて、醫師にとれる米絹など多く
あたへて後、なを門尉を呼て、我癒の兒平にて命をたもつる
をば醫師拔群なんとこそ思へ。ゆゆしけもつきを
そのもき者とおぼしめして、夷とをづかりて陸奥
国へもつかはされしなり。さるふ人を殺すべきにあらず
えしい知れる。しかるに醫師とも害して人にとうさ

ぐんとをもなり海道にうち捨てて帰ることをば
射殺すべしとて、なを門尉いとゆゆしく作ぬるのが
らんをとめうくれ居くぬ後盜の風情よりそれして射殺
し侍るん。さうの命て出さすべし。其用意仕れ
とそ云さ出くぬそうふ醫師ら命をもうくれ事なり。
又ぐ所をばぬぐすべきかをいへば醫師大てゆゆしあて。
いつふをけくしいまいてぬるをばこそにたる業
門尉がいとよりきふたるにつきを捨ろ
判官代をこたのきて是下ハおうて越のくぬるみる
りはすべきをつとしけきべかく告ぬるこそ。醫

所より公相くだりて。西門ぐちに出でゝ。ぶたの
門府ぐちへはせ入て。醫師馬より下りて。後者乃
ざくにたゝせて。行とゝ盜賊出来りて。手を負て行判官代
をうばとらんとしけれども。一矢射落しけれ。後者
い出あげらるゝ。醫師へはせ寄て。よるべしとゝ。
右の門府い館へ帰て。射殺しゝ由申しければ。貞盛
よろこびて居あるゆ。醫師いはせて。手を洗て。判官代
うゝされうべ。守いんて右の門府をよびて。こゝ何と
もゝる事ぞや。西の右の門府醫師へ歩して。後者の相
ゝてゆくとゝろびて。馬よりまろび出てあやまりて。

判官代を射ころし侍ものとせばや守げみもちたるをんなとらいてやうのちからをていとくびをねじてゆみ弦にて
の媳婦が服を割てやうの紙をうんとこしらへ其内に金紙
あるとけくる醫師を害きんとけるとてやうを罷
ちろ人ちりきやこれい真盛が一の郎等鎌倉ちのまろ
とあはちろをちろ紙同つぶてやく侍りけるとこそ也

今昔物語六